

縄文海進によって形成された沖積平野



▲① 関東地方南部の縄文時代の海岸線と貝塚の分布

読図 貝塚はどのようなところに分布しているだろうか。

日本で最も広い関東平野は、台地が卓越している。台地の間を利根川、荒川、多摩川などの河川が流れ、河川沿いに沖積平野をつくっている。現在の沖積平野は、海面が低下していた1万年前ごろまでは深い谷だった。その後、地球が温暖化して氷河が融解し海面が上昇すると、7000年前ごろには谷は水没しておぼれ谷になった。当時は、現在よりも温暖であり、日本付近の海面は2～3mほど高かったと推測されている。この海域の拡大は縄文海進とよばれる。その後、おぼれ谷は河川の運搬する土砂によって、上流側から埋め立てられ、沖積平野となった。おぼれ谷が広がった当時、魚介類などの食料から出る生ごみや貝がらなどの捨て場として、海岸沿いにつくられたのが貝塚である。縄文時代の海岸線の位置はこの貝塚から推定された。



▲② 河岸段丘の形成 河岸段丘は河川沿いに形成される階段状の地形で、ほぼ平坦なところを段丘面、それをくぐる崖を段丘崖とよぶ。一般に、高いところにある段丘ほど古い時代に形成されている。

用語解説

① 台地 更新世(約260万～1万年前)に形成された扇状地や三角州などが隆起した地形。日本では、約12万年前の最終間氷期とそれ以降にできた段丘を、狭義に台地とよぶことが多い。広義の台地には、溶岩台地や卓状地などが含まれる。

② 丘陵 台地のような平坦地を含まず、起伏に富むが、山地ほどけわしくなく、標高も低い地形。小さな谷が刻まれていることが多く、谷底には谷地田や谷戸田、谷津田とよばれる小規模な水田がみられることもある。

☑ チェック

河川の作用で形成される地形について、土地利用の特徴を説明しよう。

台地の形成と
その利用

沖積平野の周縁部には、高さ2～3mから数十m以上の崖に囲まれた台地や小山のような丘陵が分布することがある。台地の多くは、かつての沖積平野や浅い海底が、土地が隆起したり海面が低下したりすることで形成された。河川沿いにできる河岸段丘や海岸にできる海岸段丘も台地の地形の一つである。

台地や丘陵は、水を得にくく、起伏もあるため、水田にはあまり適さない。そのため、畑や果樹園、雑木林などに利用されてきた。しかし近年は、大都市圏の郊外を中心に台地の地形改変が進み、ニュータウンや工業団地、ゴルフ場などの開発が進んでいる。台地は、周囲よりも標高が高く地盤が安定しているため、水没や液状化の危険性が低い。そのため、災害時の避難地域として適している。2011年の東日本大震災以降は、被災地を中心に、海岸沿いなどの低地にあった住宅地を台地に移す動きもみられるようになった。